創価大学

Discover your potential
自分力の発見

図書館報 SEASON

2021 SUMMER No.54

写真：創価教育万代之碑

ISSN 1349-3760

2 コラム　井田旬一 理工学部教授

4 図書館コレクション／大学の歩み　蔵書紹介

6 図書館提示版

『木に学べ』
西岡常一 著

井田旬一 理工学部教授

木に学べ。タイトルからして無骨である。本書は法隆寺の全面改修を行い、薬師寺の再建を指揮した、日本最後の宮大工棟梁と言われる西岡常一氏のインタビューを纏めたものである。そのため、内容もタイトルに劣らず、一切飾りがない。素朴かつ無骨な語り口で、法隆寺、薬師寺などの古代建築について縦横無尽に語っていくものとなっている。

法隆寺、薬師寺はどちらも木造建築である。一般的に、木造建築と鉄筋コンクリート建築、どちらがより長い年月、風雪に耐えることが出来るかと問われて、木造建築と答える人がどれほどいるだろう。調べてみると、現在の鉄筋コンクリートの寿命は諸説あり、またメンテナンスの有無にもよるようだが、およそ七十～百五十年程度のようである。一方、木造建築である法隆寺を西岡氏が解体修理した時、建築からすでに千三百年を経ていたという。法隆寺は鉄筋コンクリートの十倍もの長きにわたって、その姿を留めてきたのである。

もちろん、法隆寺は一般的な木造建築ではない。では、法隆寺の超長寿命の秘密は一体何なのか。西岡氏の話が進むにつれ、その理由が徐々に明らかとなっていき、これまで持っていた木造建築に対するイメージが大きく覆されていく。のみならず現代科学や技術が最も進んだものであるという固定観念も現代人の思い上がりにすぎないことにも気付かされる。

まず、千年を超えるような木造の建築物をつくるには、樹齢千年を超える檜を使う必要があるという。続く理由を読んで納得である。曰く、樹齢千年を超える木は、千年以上の競争に勝ち抜いた木である。であるから強くて当然という事である。しかし、素材が良ければ千年持つ、というわけではもちろんない。素材が良くてもそれを活かせなければ意味がない。そこで、本書に繰り返し出てくる「堂塔の木組は寸法で組まずに木の癖で組め」という言葉が出てくる。これはこれまで法隆寺の宮大工棟梁にのみ伝えられてきた口伝の一つである。

現代の建築では、まず設計図があり、各部材の寸法は予め決まっている。そのため、様々な部材はその寸法に狂いなく用意されている必要があり、それらを正確に設計図通りに組み合わせることで建物は完成されていく。ところが宮大工は寸法よりも木の癖を活かす方を優先する。そのため、寸法は同じである必要はないという。

そしてこれは「堂塔の建立には木を買わずに山を買え」という、別の口伝とある意味対になっている。今は、木材は伐採された状態のものを買うのが普通である。しかし木の癖は環境で決まる。そのため、その木が立っているところを見ない限り、その木の癖は見抜けない。伐採され、寸法通りに切られて仕舞えば、その木が右に曲がる癖があるのか左に曲がる癖があるのかわからないというのである。それでは木の個性は活かせないのだ。

曲がった木も同じ寸法に切り出せば真っ直ぐになり、見た目もきれいになる。しかし、曲がる癖のある木は時間が経てば曲がっていく。宮大工はそんな今だけ良ければ、形だけ良ければという仕事は絶対にしない。様々な癖を持つ木の個性を見抜き、それをお互いに補い合うようにうまく抱き合わせて組み上げる。強い木も弱い木もそれぞれに見合った役割を与えていく。そうすることでたとえ大きさは不揃いでも、木一つ一つの持つ本来の強さも美しさも活かされ、それが全体としての強さ、美しさに繋がっていくのだそうだ。

そしてこれは、氏の「法隆寺に代表される飛鳥の建築では外の形にとらわれずに木のそのもの命をどう有効に活かして使うかを第一に考える」との言葉に象徴されているように思う。この言葉に込められているのは、木は堂塔を作る「ただの部品」ではなく、「一つの命」という思いだ。そこには私たちが忘れてしまった、自然に対する本当の愛があり畏敬があり、感謝がある。そのようにして作られた法隆寺は千年を超えて存在し続け、私たちに忘れてはいけない大事なもの今に伝えてくれている。

それにしても、千年残る仕事をしようとの思いで、命懸けで宮大工をされていた西岡氏のスケールの大きさには圧倒される。氏には目先の利益や栄誉などは一才眼中にない。飛鳥時代の日本にも氏のような棟梁、そして志を同じくするたくさんの大工がいたのだろう。

本書には、これまで法隆寺の宮大工棟梁にのみ伝えられていた門外不出の心構えなどが余すところなく綴られている。なぜか。それは、氏が最後の宮大工棟梁であり、後継者がいないからである。そしてそれは宮大工だけでなく、日本の多くの伝統工芸、芸能などが直面していることでもある。残念でならない。私たちは豊かで便利な暮らしと引き換えに、実は想像以上のものを失いつつあるのではないだろうか。

本書によって、古代建築や日本古来の知恵の素晴らしさに気付かされた。まずはコロナが終息したら、法隆寺・薬師寺を訪れてみたい。

図書館の魅力を再発見

創価大学 図書館コレクション

Ikeda collection 池田文庫

創立者が若き日から収集された蔵書約７万冊を「池田文庫」として設置しています。創立者　池田先生は、「学生の皆さんが、大いに読み、活用して実力を磨き、成長してくれるならば、こんな嬉しいことはない」、とのご伝言を添えて、創価大学図書館に蔵書をご寄贈くださり、1997 年５月８日に「池田文庫」として開設されました。

蔵書の分野は、哲学、歴史、社会科学、自然科学、芸術、文学など幅広く、学術的にも優れた図書が多くあります。図書館では、池田文庫を創価大学の永久財産として、後世に継承していきます。

＜利用方法＞　池田文庫の図書は、館外貸出はできません。館内閲覧のみです。

Founder's Works collection 創立者著作コレクション

「創立者著作コレクション展示室」は、これまで学生や学外の来学者などから「創立者の平和や人権の思想を学ぶため、御著作を一同に集めた展示室が欲しい」などの要望にお応えし、2008 年４月に中央図書館の3階閲覧室に設置しました。

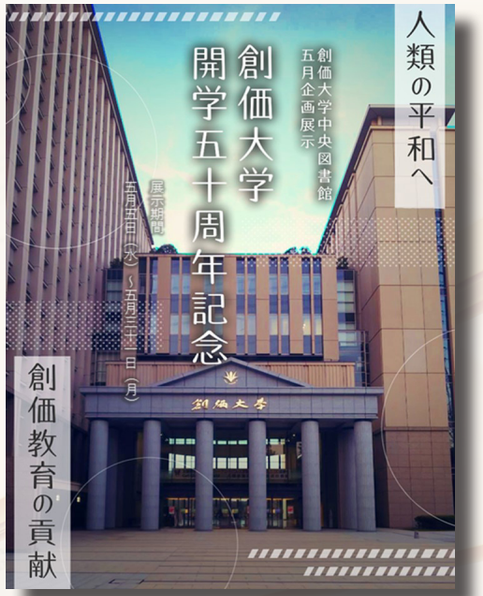
蔵書数は約 4000 冊（和書約 2500 冊、洋書約 1500 冊）、日本語を含め 38 言語で出版された図書を展示しています。創立者の著作は現在も継続して収集しています。

＜利用方法＞

創立者著作コレクションは、館外貸出はできません。展示室内で閲覧をお願いします。

創立 50 周年 大学の歩み 蔵書紹介

図書館で知るあの日



2021 年５月 企画展示

創価大学中央図書館では創立50周年を記念して、「創価大学開学50周年記念　―人類の平和へ　創価教育の貢献―　」とのテーマで、5月5日から31日まで企画展示を行いました。

この展示では、創価大学開学の淵源や、創価教育に込められた思いや願いを今一度、確認し合える機会となるような文献資料を多数、展示しました。

図書館報 SEASON7 月号では、その中から２点、創価大学中央図書館ならではの蔵書をご紹介いたします。

『創価大学写真集』

1975年発刊の『創価大学写真集』では、草創期のキャンパスの風景（文系A棟や体育館、大教室、寮など）、当時の創価大学に学ぶ学生の生き生きとした様子が伝わってくるような一冊となっています。

『創価大学：人間教育１０年の歩み』

1980 年発刊の『創価大学：人間教育 10 年の歩み』では、創価大学の開学前、そして開学の昭和46年から昭和55年までの一年一年の歩みを、その年を象徴するような出来事の記述や写真とともに振り返ることができます。創立者池田大作先生をお迎えして開催された歴史的な第1回創大祭、第1回滝山祭の貴重な写真も掲載されています。

TOSHOKAN 図書館掲示板 KEIJIBAN

図書館の開館日程について

開館日程は図書館 Web サイトでご確認をお願いします。

現在、新型コロナウイルス感染防止対策のため、本学構成員以外の方は図書館への入館をお断りしております。

また今後の経過により、開館日程及びサービスが一部変更する可能性もございます。図書館 Web サイトでお知らせしますので、事前に図書館カレンダー等の情報を確認の上ご来館ください。

ご理解・ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

夏期長期貸出しのお知らせ

大学の夏季休業に伴い、図書の長期貸出が始まっています。この機会にぜひ、たくさんの本に出会ってください。

学部生・別科生・短大生：２週間貸出者
７月９日（金）～８月３１日（火）

教職員・大学院生・通教生：４週間貸出者
７月９日（金）～８月１７日（火）

一斉返却日：２０２１年９月１５日（水）

書庫利用講習会について

2021 年度の書庫利用講習会の開催日程は決まり次第、図書館 Web サイトのお知らせにて告知いたします。書庫利用講習会へ参加をお考えの方は図書館 Web サイトをチェックしてください。

【今年度の参加者の声】

- 80 万冊ある書庫利用について知らない人が正直たくさんいると思います。もっと多くの学生に認知してもらうといいと思いました！
- 早く池田文庫と和漢書を読んでみたいです！
- 書物の多さに驚くとともに学生のためを思ってくれる創立者や、たくさんの方々の真心に触れることができました。今後たくさん図書館を利用していきたいです。

創価大学 附属図書館
〒 192-8577　東京都八王子市丹木町 1-236
http://lib.soka.ac.jp